2022年度(令和4年度)学校評価自己評価表

城西中学校区	校番 58	福山市立山手小学校
最終更新日		2022年(令和4年)2月10日

I 福山市

ミッション 福山に愛着と誇りを持ち、変化の激しい社会をたくましく生きる子どもを育てる。
ビジョン 「福山100NEN教育」の基本理念のもと、各中学校区・学校が「21世紀型“スキル&倫理観”」の育成に向けた特色ある教育課程を編成し、日々の授業を中心として評価・改善を進めながら、子どもたちの確かな学びを実現している。

II 中学校区

前年度学校関係者評価の主な内容 ○学習の取り組み方、児童生徒への向き合い方など、現状に合わせて改善が見られた。ICT教材を使用することにより、自分に合った学習方法を児童生徒一人一人が見つけることができるよう、更なる改善を期待する ○コロナ禍で思うように取組ができない中、学校内での学習や活動は、工夫され実施している。学校外との連携も、どうしたらできるかを考え、取組を進めてほしい	児童生徒の現状 ○小中の連携が図られ、落ち着いて意欲的に取り組む姿が多く見られるようになってきた ○「子ども主体の学び」の実現に向け、研究・実践を継続し、授業改善が進みつつある ○コロナ禍の状況が続いたが学校行事を中心にあらゆる活動に主体的に取り組み、自分たちが学びを創り上げていくという意識を高めた ●長期欠席児童が多く、小中が緊密に連携し、丁寧な取組を継続する必要がある	育成する力 21世紀型“スキル&倫理観” コミュニケーション力・表現力・忍耐力	めざす子ども像 (義務教育修了時の姿) 地域に愛着と誇りを持ち、心豊かにたくましく生きる子ども
		中学校区として統一した取組等	○自己肯定感を高める(合同ボランティア活動・オープンスクール) ○コミュニケーション力・表現力・忍耐力をつける(校区公開授業研究) ○健康への意識を高め、体力向上を図る (体力向上の取組・体力テストの分析・校区保健だよりの発行)

III 自校

ミッション 子どもたちが主体的に学ぶ授業づくりに取り組むとともに、保護者や地域の願いにしっかり応えることができる。		育成する力 21世紀型“スキル&倫理観” コミュニケーション力・表現力・忍耐力	
学校教育目標 自ら学び 心豊かに たくましく生きる児童の育成		めざす子ども像	【表現力】 <低学年>順序立てて、丁寧に表現する。<中学年>根拠を挙げ、筋道を立てて表現する。<高学年>全体像を意識しながら表現する。 【コミュニケーション力】 <低学年>お互いの話に集中しながら話し合う。<中学年>お互いの考えを比べ、よさを見つけながら話し合う。<高学年>お互いの立場や意図を理解し、相手の立場に立ちながら話し合う。 【忍耐力】 <低学年>約束やきまりを守る。<中学年>公德心をもつ。<高学年>主体的に責任を果たしたり、集団に貢献したりする。
現状 <児童生徒> 児童個々に寄り添った対応を根気よく行うことで、問題行動や欠席児童、不登校児童は減少傾向にある。しかし、登校してきても意欲的に学ぶことができていない児童もあり、学力調査の結果からも、全体的に基礎・基本の定着が不十分であると感じている。しかし、自己肯定感が高く、意欲的に学んでる児童は多い。また、外遊びを集団で楽しんでいる姿も多く見られる。 <授業> 児童の主体的な学びを実現する授業づくりを、組織的に研究主任を中心として行ってきた。その結果、「授業で考えることが面白い」と答えた児童は84.4%であった。しかし、児童の興味・関心をつかみ、新たな課題を生み出す授業づくりまでには至っておらず、また、ICTの効果的な活用についても課題が多い。今後も引き続き、児童が面白いと感じる授業づくりのために、組織的に授業を見合うことを通して、授業づくりを進めていく。			テーマ 表現力・コミュニケーション力・忍耐力を高める授業の創造 ～主体的に課題発見・解決する営みを通して～
		研究内容等	<ul style="list-style-type: none"> ・「カリキュラムマップ」を手掛かりに授業実践を行い、点検、改善をしていく。 ・資料の読解力・活用力が身に付く授業づくり。 ・授業の振り返りにこだわり、学びの連続性や家庭学習とのつながりを創造する。 ・読書の習慣化を促す取り組みをする。
		めざす授業の姿	<ul style="list-style-type: none"> ・必然性があり、児童の興味関心に基づいた課題設定がされている。 ・個に応じた多様な学びが生まれる授業。 ・教師が学びのファシリテーターとなり、課題発見・解決へと児童が主体的に学んでいく授業。 ・個と一斉のバランスがとれた授業。 ・ICTの効果的な活用。

IV 目標・取組及び評価指標等の設定と評価

福山市立山手小学校

年目	中期経営目標	重点	分類	短期経営目標	目標達成に向けた取組	評価指標	中間評価(10月1日)			最終評価(2月末)					
							□指標に係る取組状況	70%以上評価	達成評価	改善方策	□指標に係る取組状況 ◎短期中期経営目標の達成状況	70%以上評価	達成評価	総合評価	改善方策
3	児童主体の授業づくり	★	継続	自身の「学び」に納得している児童の育成	<ul style="list-style-type: none"> ◇「学び」から、「伸び」を確かめ、「学習が自分に合っている」と振り返ることができる ◇自分に合った図書を選ぶことができる ◇児童の「学びの姿」を通して、授業について日常的に対話する 	<ul style="list-style-type: none"> 授業で考えることが面白いと実感する児童を80%以上にする 学力を伸ばした児童の割合を高める(学力調査正答率40%未満の児童の減少) 自身の読書量が増えてきたと実感する児童を80%以上にする 全教職員授業公開を月に1回実施する 資料の見方や活用について意識した授業づくりを進める 	<ul style="list-style-type: none"> 児童が興味をもつような発問をし、授業で考えることが面白いと実感する児童は89%であった。 5・6年生において、今年度学力を伸ばした児童は、国語78.8%、算数69.7%であった。昨年度5・6年生と比べ、国語は13.2ポイント高まり、算数は9.5ポイント下がった。(正答率40%未満の児童は昨年度に比べ、国語が12%減少したが、算数は3%増加した。) ICTを効果的に活用し、タブレットを使った学習方法が面白いと実感する児童は90%であった。 朝読書が定着し、自身の読書量が増えてきたと実感する児童が81%となった。 全教職員授業公開の予定表を計画的に作成し、100%実施することができた。 校内授業研究において、資料の活用について協議を行ったことで、普段の授業づくりに生かそうと意識が高まった。実践した教職員94.1%。 	4	3	<ul style="list-style-type: none"> 児童の主体的な学びになるよう、カリキュラムマネジメントを通して適切な場面で児童の興味を引く発問や教材の準備、ICTの活用などを計画的に実施する。 ドリル学習と授業後の振り返り活動を徹底し、学びのつながりを日常化させる。 引き続き、朝読書を実施する。また、読書の面白さや実施意図が伝わるよう放送で呼びかける。 翌月の見合う授業の予定表を準備し、週案作成の一部として計画を立てる。 職員研修で定期的に授業づくりや子どもとの関わり方、高校入試について取り上げる。 	<ul style="list-style-type: none"> 授業で考えることが面白いと実感する児童は87.5%であった。授業づくりの際にカリキュラムマネジメントを行うことで学年内での合科的な指導や教材の工夫などを実践できたと考えられる。(達成) タブレットを使った学習方法が面白いと実感する児童は92.4%であった。教科指導における中学年以上でのICT使用率は100%。(達成) 朝読書の導入と指導の徹底により、自身の読書量が増えてきたと実感する児童が89.3%となった。校内での合言葉「DDF(読書、ドリル、振り返り)」を作り、ポスターや放送で活動を呼びかけたことも効果的であった。(達成) 研修や会議などで授業の見合いを促した結果、他学年の授業観察を実施できた教職員は100%であった。(達成) 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 児童アンケートの精選を図り、低学年では「生活科」を、中高学年では「理科」「社会科」の質問項目を取り入れる。児童の興味・関心を全体的にとらえることを目的とし、結果をもとに教科指導に生かす。 学期末に少人数指導を取り入れる。 「DDF(読書、ドリル、振り返り)」の取組内容や意義を教師と高学年が中心となって周知する。 児童の伸びを把握する調査を活用し、指導の個別最適化を図る。
1	自己指導能力の育成		新規	よりよい学校生活にしている児童の育成	<ul style="list-style-type: none"> ◇違いを理解し、互いを認め合える集団づくりを進める ◇集団の一員として、役割を果たそうとする 	<ul style="list-style-type: none"> 「自分には良いところがある」「友達や家族や先生に「ありがとう」と言われたことがある」について肯定的回答の割合を85%以上にする 共に活動した友達との間で、肯定的相互評価が全員できる 児童会目標を達成しようとしている児童を88%以上にする 	<ul style="list-style-type: none"> 各学級で、「良いところ見つけ」などの取組を行ったことで「自分には良いところがある」の肯定的評価は91%、「友達や家族や先生に「ありがとう」と言われたことがある」の肯定的評価95%となった。 「私の良いところをみんなが知っている」の肯定的評価は83%「友だちの良いところを知っている」の肯定的評価90% 児童会目標を分かりやすいものにし、毎月目標の振り返りを行ったが「児童会目標を達成するために進んで取り組むことができた」の肯定的評価は86%であった。 	4	3	<ul style="list-style-type: none"> 各学級で「良いところ見つけ」を帰りの会等で引き続き行う。 各学級で書いた意見を給食放送で伝えることで全校へ広めていく。 アンケートの質問を分かりやすいものに改善する。 帰りの会等で児童会目標を振り返る時間を毎日設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 「良いところ見つけ」や給食放送の取組を続けることで、「自分には良いところがある」の肯定的評価91%「友達や家族や先生に「ありがとう」と言われたことがある」の肯定的評価96%となった。(達成) アンケートの質問を分かりやすいものにした結果、83%から87%、90%から96%に上がった。(未達成) 児童会目標を振り返る時間を毎日設定することで、肯定的評価は89%となった。(達成) 	4	4	4	<ul style="list-style-type: none"> 各学級での「良いところ見つけ」や給食放送で各学級の意見を全校に伝える取組を引き続き行う。 各学級で行っている「良いところ見つけ」等を利用し、お互いを肯定的に評価できる機会を増やす。 引き続き取り組みを続けていく。

			健康体力づくりへの意識を高めた児童の育成	<ul style="list-style-type: none"> ◇学校で「やってみたいこと」をすべての児童がもっている ◇安全な生活を心掛け、学校で運動する児童を増やす ◇自己の健康に対する意識を高める 	<ul style="list-style-type: none"> 不登校児童を減少させる(新たな不登校児童をださない) 校舎内を走らないように心掛けている児童を70%以上にする 外遊びを進んでする児童80%以上にする 「保健だより」等の発行や家庭連絡を通して、虫歯治療率を上げる 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭訪問や職員間での情報共有を行っている。新たな不登校児童0名 児童会によるポスター掲示や教員による放送など、啓発活動を行い、校舎内を走らない児童は74%となった。 休憩時間の過ごし方を見直した(タブレットは原則使用しない等)。外遊びを進んでする児童、85%(9月末) 保健だよりや個人懇談等で保護者に呼びかけを行った。9月末現在、むし歯治療率61% 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、保護者や関係機関と連携を図る。 引き続き啓発活動を行い、校舎内を歩く雰囲気づくりをする。 児童会等を中心として外遊びを啓発する取組を企画する。 引き続き、保健だより等で治療の啓発をしていく。 	<ul style="list-style-type: none"> 家庭訪問や職員間での情報共有を行ったが、新たな不登校児童が3名。(未達成) 啓発活動を続けた結果、校舎内を走らないように心掛けている児童は83%となった。(達成) 外遊びを啓発する活動を行った。外遊びを進んでする児童79%(12月末)であった。(未達成) むし歯治療率66%(1月末現在) 	3	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 保護者や関係機関との連携、職員間での情報共有に加え、スクールカウンセラーとの連携を進める。 引き続き啓発活動が続ける。 児童会等を中心として、外遊びキャンペーンを行う。
4	働き方改革の推進	継続	学びづくりへ向かう時間をつくる(時間外在校時間を減らす)	<ul style="list-style-type: none"> ◇企画委員会等で業務改善策を考える ◇見通しをもって業務を行っていき、毎月の時間外在校時間の累積を見える化する 	<ul style="list-style-type: none"> 職員間で情報共有する 授業準備の時間が増えた職員を90%以上にする 	<ul style="list-style-type: none"> 職員アンケートにより業務改善策を出し合い、出た意見を職員間で共有した。 職員室入口に入退校記録用のパソコンを設置することで、各自で在校時間の累積を確認することができた。「授業準備の時間が増えた」職員は89%。 	3	3	<ul style="list-style-type: none"> 共有した業務改善策について検討し、実践できることに取り組む。 引き続き、時間外在校時間の累積の見える化を行う。 学年や各部で業務について見直したり分担したりすることで、全職員が授業づくりの時間を作れるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 業務改善策について、職員間で情報共有し、改善できることに取り組んでいる。 入退校記録パソコンにより、各自、在校時間の累積を確認しながら業務を行った。 スクールサポートスタッフへの依頼や業務内容を学年や各部で確認したり分担したりしながら進めたことにより、100%の肯定的評価となった。(達成) 	4	4	5	<ul style="list-style-type: none"> 引き続き、業務改善について考え、できることを実践する。 学年・部内で業務内容を確認したり見直したりする。

[プロセス評価の評価基準]

[達成評価の評価基準]

[総合評価の評価基準]

評点	評価基準
5	取組の目的に対する共通理解が顕著に認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が十分に図られた。
4	取組の目的に対する共通理解が認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決が概ね図られた。
3	取組の目的に対する共通理解が一定程度認められ、状況の変化、問題が生じた際は、協同的な課題解決がある程度図られた。
2	取組の目的に対する共通理解が認められ難く、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決があまり図られなかった。
1	取組の目的に対する共通理解が認められず、状況の変化、問題が生じた際の協同的な課題解決が図られなかった。

評点	評価基準
5	目標を大幅に達成し、十分な成果をあげた。
4	目標を概ね達成し、望ましい成果をあげた。
3	目標をある程度達成し、一定の成果をあげた。
2	目標を下回り、成果よりも課題が多かった。
1	目標を大きく下回り、成果が認められなかった。

評点	評価基準	
5	100%以上の達成度	十分に目標を達成できた。
4	80%以上100%未満の達成度	概ね目標を達成できた。
3	60%以上80%未満の達成度	ある程度目標を達成できた。
2	40%以上60%未満の達成度	あまり目標を達成できなかった。
1	40%未満の達成度	目標を達成できなかった。